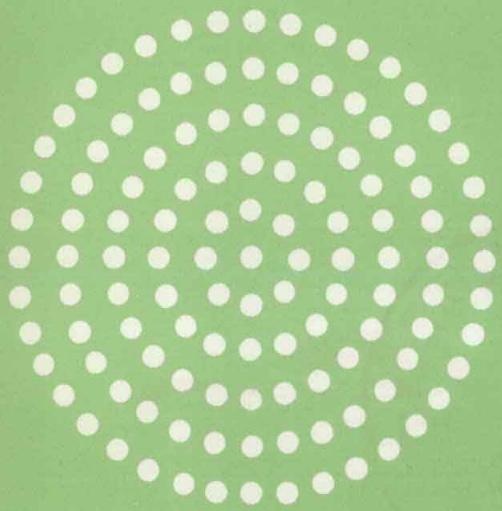
日本の詩集 12

武者小路実篤詩集

日本の詩集　12

武者小路実篤詩集



昭和四十三年六月十日　初版発行
昭和四十九年八月三十日　七版発行

著作者　武者小路実篤
発行者　角川源義
発行所　角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二　振東京一九五二〇八
電話東京（二六三）七二一（大代表）

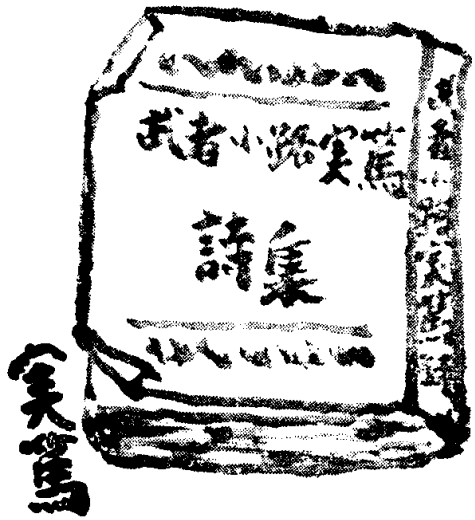
日本の詩集　12　武者小路実篤詩集

印刷カラー　暁美術印刷株式会社
本文　旭印刷株式会社
函・扉　暁美術印刷株式会社
製函　三真堂印刷紙器株式会社
製本　株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします

0392-571912-0946(2)

目次



太陽と月

秋が来た　一〇
淋しい　一二
長い廊下　一四
亀の如し　一六
我にたよれ　一七
笑ってやりたい　一八
世　間　一九
誕生日に際しての妄想　二〇
死　二七
一人の女と三人の男　二八
師よ師よ　二九
バン・ゴッホ　三〇
ホイットマン　三一
ホドラー　三二
ドストエウスキーの顔　三三
淋しさ　三四
泉の嘆き　三五
太陽と月　三六
僕から見ると　三八

さあ俺も

浦島太郎の出発　四〇
浦島の独白　五五
与えるものは　五六
レンブラント　六〇
自分が　六一
春　六三
友達の喜び　六五
喜びは　六六
働きの歌　六　六七
花　も　六一
神というものは　六三
まあいい　六五
大きな木　六四
さあ俺も　六五
本気に　六六
俺の空想　六八
俺は、俺は　六八
仏陀と言う　六九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

死ぬ淋しさ　八〇
だ　が　八一
神を見た者　八三
ある友達　八五
若き木と春　八六
新しい生活　八八
生　長　八九
自然のままに　九〇
もう一歩　九一
俺はどうせ強情張りだ　九三
未来の人間　九四
過去の人間　九六
我等は　九七
俺の空想　九八
心の清い時　一〇一
自然、必然、当然　一〇二
この道より　一〇三
俺はこの幸福を　一〇四
俺はどん底の覚悟　一〇五
平　和　一〇六
人間が　一〇八
笛を吹く男　一〇九
一つの大理石から　一一〇
どの枝も　一一一
耶蘇は生まれた今日　一一三
進め、進め　一一四
花のなかから　一一八
戦争はよくない　一二〇
目をつむって　一二三
静かな淋しさ　一二三
老いたるレンブラント　一二四
トビアスの帰り　一二六
どちらが本当か　一二八
人間の生かされた理由　一二九
支那の画を　一三〇
花のなかから　一三一
叱られると　一三三
心のよろこび　一三四
静かなねむり　一三五
生命の王と愛の女神　一三八
父と姉の死

リンゴの画に題す　一四二
桃　栗　一四三
私はかきたい　一四四
死神に　一四八
達人は　一四九
暢気ものの夢　一五〇
第五十回の誕生日の朝の感想　一五二
泉　一六〇
矢を射る者　一六二
五　月　一六四
野菜の画に　一六七

君も僕も美しい

いい墨　一七二
君も僕も美しい　一七三
一人の画家　一七四
それが新しき村　一七五
歓喜雀躍　一七六
志賀と僕　一七九
歩くなり　一八二
ある画家とある蛙　一八四

大きな心　一八五
孫　一八六
美神と人間　一八八
原稿書こうと思えども　一九二
馬鈴薯　一九四
馬鈴薯賛　一九五
笛を吹く男　一九八
最後のもの　二〇二
牧谿と梁楷を賛美す　二〇三
満八十になって　二〇九
うんどうぐつ　二一六

自然の愛児

この本　二一八
沈　黙　二二二
自然の愛児　二二三
自然の傑作　二二四
私の心の音信　二二六
老人の願い　二二八
人間の手　二三〇
かぼちゃとじゃがいも　二三二

不思議の因縁　三三八
努力　三三六
行く道　三三八
生きている者よ　三三九
自己の真価　二四〇

解説

評伝　串田孫一　二四二
鑑賞　吉田精一　二四九
詩の旅　大竹新助　二六七
年譜　二六九

写真協力　岩田恒雄・植田正治・坂口嘉朗
緑川洋一・オリオンプレス

実篤

武者小路実篤詩集

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

宴篤

太陽と月

秋が来た

秋が来た、
涼しい秋が来た、
淋しい秋が来た、
彼女なつかしい秋が来た。

彼女を恋し始めたのは秋だった。
彼女を恋していることを母に打ちあけたのも秋だった。
彼女の遠くへ引っ越したのも秋だった。
さもなくも秋は淋しい時だ。

秋が来た、
その秋が来た。
去年の今時分は毎日彼女の姿を見た。
今年は彼女を見ずに秋をすごすのだ。

淋しい

自分は又自分を信じられなくなった。
自分は生きている甲斐のない淋しい生涯を送るのだ。

自分は又他人と話をするのがいやになった。
無意味に口を動かし、心に響かぬ言葉を聞くのはいやだから。
自分は孤独になりたい。しかし時々彼女の姿が見たい。

自分は淋しい淋しい涙の谷をさまよいたい。
涙の谷のみ自分には故郷の気がする。

彼女のことを思うと淋しくなる。
今の自分は彼女に接吻したくもない、話したくもない。
しかし姿は見たい。
どうしているかが知りたいのだ。
見交(みかわ)して感じる淋しさがなつかしいのだ。

しかし彼女に逢うことを恐れている。
逢った処でそれによって二人の運命はどうにもならない。
もしも彼女を淋しくしたら。
どうせ駄目なものなら彼女を淋しくしたくない。
今の自分に男らしい所は少しもない。
元気もない、活気もない。
そうしてあの世に行ったら、お貞さんや、まきや、彼女に、
僕は淋しい生涯を送って来ました、
これが貴女達の下さった最大の贈物ですと言いたい。
いやみではない。
淋しい内に何かある、
淋しい処に故郷がある。
自分は淋しい心に馴れている。

自分は淋しい人間だ、
淋しいことの好きな人間だ。
淋しい色を帯びていないものは何でも自分には賤しいもの、
つまらぬもののように思える。
華かな内に淋しさを求めて、

そこに故郷を見い出す自分は人間だ。

自分は今迄それに気がつかなかった。
気がつかない方が淋しいだろう。
だが気がついた方が淋しいかも知れない。

愛する者には愛されず、
何事もせずに生きられる為に、
自分は自分の淋しいことの好きなことを感謝する。

長い廊下

長い廊下を一人で
どしんどしんどしんと
大股(おおまた)で力を入れて歩いて見たい。
そうして時々、大声で怒鳴(どな)って見たい。
お――い。

反響のない所で
力を入れて歩くのは、
損な気がする、
反響のない所で、どなって見るのも
消えてゆくのが淋しい。

どしんどしんどしん
あたりにそれが響く。
お――い

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com